バンコクの風

ลมจากกรุงเทพฯ

日本学術振興会バンコク研究連絡センター
活動報告（2014年7月～9月）

【バングラデシュ農業大学で実施したJSPS事業説明会参加者】

センター長挨拶

「バンコクの風」（JSPS バンコク研究連絡センターの活動報告）2014 年 7-9 月分をお届けします。この報告書のカバーする期間は、一年で最も事業が集中するときにあたります。多くの JSPS 国際事業の申請締め切りが 9 月に設定されており、それまでに日本の研究者と事業計画を作り上げる期間を考慮に入れて、JSPS 事業紹介ガイダンスセミナーを集中的に実施しています。

今年度は、タイ国内だけでなく、フィリピン、バングラデシュ、インドネシアで実施しました。フィリピン、バングラデシュについては、それぞれの JSPS 同窓会との共催の形での実施でした。

これら同窓会は設立されて数年が経過し、役員・理事会を構成するメンバーも設立時の「著名人」から、研究実績もさることながら、実務的にも優れた人材が選ばれたことで、同窓会の事業や事務運営がスムーズになり、当センターがかなりの部分を担っていた事務局としての仕事が軽減されてきました。これは、同窓会運営の本来の形になったという意味で、喜ばしいことです。

インドネシア、ベトナム、ネパールに同窓会設立の機運が盛り上がってきました。バンコクセンターとしては、これらの動きに注目していきます。

タイにおけるJSPSのカウンタパートであるタイ学術研究会議（NRCT）との共催セミナーの実施も、毎年 8 月の恒例事業です。実施計画の立案から実施に至るまで、NRCT 事務局との常日頃からの連携が運営をスムーズに行う要（かなめ）で、これからも「顔の見える」関係を大切にしていきたいと思っています。

2014 年 10 月吉日

JSPS バンコク研究連絡センター長　山下邦明

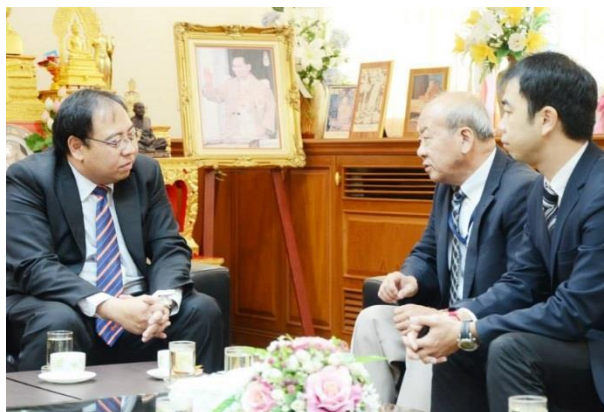
目次

ＪＳＰＳ事業説明会実施

バンコク研究連絡センターは、担当地域の大学等高等教育、研究機関を訪問し、JSPS 事業説明会を行っています。当センターの訪れた大学や研究機関の紹介と事業説明会の様子をお伝えします。

タイ・キングモンクット工科大学ラカバン(KMITL)（7 月 4 日）

KMITL は 1960 年に日本政府より学術面での支援を受け、現在では工学部をはじめ、理農工系の学部が設置され工学系分野のタイを代表する大学となりました。日本との学術交流の歴史も長く、日本から多くの研究者や専門家がカリキュラム作成支援や技術指導のために同大学に派遣され、現在も共同研究や人材育成面での連携が継続しています。

KMITL には、東海大学、国立高等専門学校機構、福岡工業大学のブランチオフィスが設置されています。今回は、これら 3 機関とも連携し、オフィスを訪問するとともに、事業説明会にも各機関の代表者にご参加いただきました。

【Anantawat 国際交流担当副学長を表敬訪問】

Anantawat Kunakorn 国際交流担当副学長を表敬訪問し、タイの学術情報について意見交換しました。副学長は、かつてタイの研究者は欧米志向だったが、アジアの大学に注目するようになってきたと近年の学術情勢の変化に言及し、JSPS の研究者招へい事業は KMITL でも人気が高く、大学としてもより多くの研究者に日本で研鑽を積んできてほしいと述べました。しかし一方で、タイ人研究者の海外流出を懸念しており、当センターより、フェローシップ終了後に日本での経験を帰国後のキャリアに生かしてほしいと伝えました。

今回の事業説明会には、50 名近くの研究者が参加しました。Anantawat 副学長の開会の挨拶の後、当センターより国際事業を説明し、申請書を記入時の具体的なアドバイスも行いました。JSPS 外国人特別研究員に採択され、北海道大学で研究された工学部 Dr. Duangkamol Na Ranong より申請の経緯や日本での生活について楽しい思い出話も含めながら体験談を話していただきました。

【左から山田副センター長、富田助教（東海大学）、Ruttikorn 情報学部長（高専、福岡工業大学）、山下センター長、Anantawat 副学長、Dr. Duangkamol】

事業説明会で日本の高等教育機関に各機関の活動を紹介していただき、タイ人研究者に日本との学術交流について具体的なイメージを持っていただけたのではないかと思います。

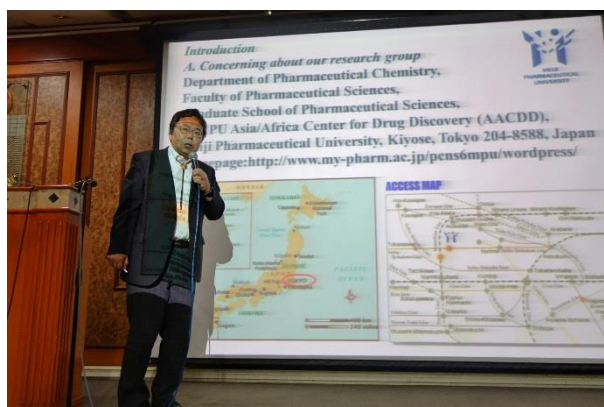
http://jsps-th.org/2014/07/04/1041

フィリピン・Santo Tomas 大学(UST)(7 月 12 日)

UST は 1611 年に創設されたアジアで最も歴史のあるカトリック系の私立大学で、18 の学部を持つ総合大学です。過去に 4 名のフィリピンの大統領を輩出しています。2013 年 3 月 5 日に同窓会理事の Maria Natalia R. Dimaano 教授を訪問した際、当センターから提案した UST での JSPS 事業説明会が、今回ようやく実現しました。

事業説明会では、Philipina A. Marcelo 教授・工学部長による挨拶の後、JSPS を代表して亀井 JSPS 人物交流課長が挨拶を行い、フィリピンと日本は距離も近く、台風などの自然災害に悩まされる等の共通点も多いことから、多くの研究者が日本での研究活動を実施して欲しいと述べました。

センターからの事業説明に加え、前日に同窓会シンポジウムで基調講演を行って頂いた明治薬科大学 齋藤直樹教授にもご自身の JSPS 事業の推進について講演頂きました。齋藤教授からは、ご自身で実施されたアジア・アフリカ学術基盤形成事業を通じてのフィリピンとの共同研究への貢献について講演いただきフィリピンの研究者に対して温かいメッセージをいただきました。

【明治薬科大学齋藤直樹教授の講演】

JSPS フィリピン同窓会理事からも講演いただき、論文博士号取得希望者に対する支援事業において博士号を取得された Philippine Carabao Center の Dr. Danilda H. Duran に、申請の経緯や、日本での研究生活と日本人研究者とのネットワーク等について話していただきました。閉会の辞は Dr. Maricar S. Prudente JSPS フィリピン同窓会長より頂きました。フィリピン同窓会会長は交代となるため、今回が会長の最後の業務となりました。

質疑応答では、受け入れ教員の探し方や各事業の採択率、申請すべきプログラムについて等、具体的な質問が相次ぎ、JSPS のプログラムに対する需要の高さがうかがわれました。土曜日にも関わらず 60 名の参加があり、フィリピンと日本の関係も深く、当地での事業説明会の必要性を再認識しました。

http://jsps-th.org/2014/07/12/1117/

【参加者に助言を行う Prudente 同窓会長】

カセサート大学バンケンキャンパス（7 月 17 日）

カセサート大学は農林業分野に非常に強く、2014 年 QS 分野別ランキングにおいて世界で 48 位に位置づけられています。事業説明会では Poonpipope Kasemsap 国際担当副学長にご挨拶いただき、JSPS バンコク研究連絡センターより事業の説明を行いました。

京都大学で博士号を取得され JSPS タイ同窓会理事も務めておられるカセサート大学農学部 Dr. Suratwadee Jiwajinda と外国人特別研究員として京都大学で研究された Dr. Chinawat Yapwattanaphun にそれぞれの日本での研究経験についてご講演いただきました。Dr. Suratwadee は論文博士号取得希望者に対する支援事業（以下、論博事業）の申請書の書き方などを丁寧に説明されました。また、Dr. Chinawat は、タイには研究資源、日本には高い研究技術があり、これらを組み合わせて二国間で共同研究を行う意義をお話されました。

事業説明会には中堅の研究者を中心に 50 名が参加し、中には 2 時間ほどかけて同大学のシーラチャーキャンパスから訪れた研究者もいました。説明会後に申請方法について当センターや Dr. Suratwadee、Dr. Chinawat に熱心に相談する研究者も多く、同大学の日本の大学との連携への関心の高さが感じられました。

http://jsps-th.org/2014/07/17/1181/

タイ・キングモンクット工科大学トンブリ（KMUTT）（7 月 18 日）

KMUTT は THE アジア大学ランキング 2014 において 50 位に位置づけられ、研究面で世界的に高い評価を受けています。同大学の論文が数多く引用されていることが一つの要因です。

副センター長より質疑応答を交えながら JSPS 国際事業の説明を行い、東京大学で JSPS 外国人特別研究員として研究されたキングモンクット工科大学トンブリ土木工学部 Dr. Pitch Sutheerawatthana に日本での研究経験についてお話しいただきました。

【関研究顧問による講演】

【「Key Points of Application」と題した講演】

さらに、関達治 KMUTT 研究顧問に「Key Points of Application」と題し、これまで多くの外国人研究者を受け入れてこられた研究者の立場から講演いただきました。申請書を書く前に自身の研究実績を整理すること、研究テーマが斬新なものであるか検討すること、また申請書の英文は簡潔に書くこと、受け入れ研究者を探す際には日本の大学のホームページで公開されている研究者情報を活用すること、その研究者にコンタクトを取る際に留意する点などを説明していただきました。

http://jsps-th.org/2014/07/18/1195/

バングラデシュ農業大学（BAU）（9 月 5 日）

BAU は農業関係の 7 学部が設置され、6,000 名近くの学生と 500 名以上の教員が教育研究を行っています。広大な敷地の中に実験用の水田、果樹園や植物園、学生や教職員用の寮やゲストハウスもあります。全ての農業分野に関する高等教育を提供し、農業に関する課題を解決するための基礎研究から応用研究に至る領域で、農業指導に当たる人材育成を行っています。バングラデシュ JSPS 同窓会（BJSPSAA）Prof. Dr. M. Afzal Hossain 会長をはじめ JSPS 事業で日本の大学で研究した経験を持つ研究者も数多く在籍しています。

【キャンパス内にある実験用の水田】

事業説明会では Dr. Nur Ahmed Khondaker 同窓会事務局長が進行を務め、Dr. A K M Nowsad Alam 同窓会副会長が開会挨拶を行いました。Nowsad 副会長は、当セミナーの翌日に安倍首相がバングラデシュを訪問し、産業分野での日本とバングラデシュの連携が今後さらに深まることへの期待と、一方でバングラデシュの社会や経済を向上させるために科学技術分野の強化とそれを担う人材育成も喫緊の課題であると述べました。

【司会進行を務める Dr. Khondaker 事務局長】

その後、山下センター長が JSPS の概要と国際事業の説明を行いました。外国人特別研究員事業や外国人研究者招聘事業については、バングラデシュは例年、中国、インドについて第 3 位の申請数であり、外国人特別研究員事業の採択者数は全体のおよそ 5%を占めており、同国において最も関心の高い事業であり、多くの質問が寄せられました。

来賓としてご参加いただいた Prof. Dr. Md. Rafiqul Hoque BAU 学長もご挨拶され、日本はバングラデシュの独立以来最も重要なパートナーであり続けており、その継続的な協力関係に大変感謝していると述べました。

【Prof. Dr. Md. Rafiqul Hoque BAU 学長（右端）と】

最後に Hossain 同窓会長が BAU で JSPS 事業説明会を開催できたことへの喜びと、バングラデシュ同窓会の活動をさらに活発化させていきたいと語りました。事業説明会には 120 名の研究者が参加し、中には文部科学省奨学金等で日本の大学で博士号を取得した研究者も数多くいました。閉会後も質問に来る研究者が後を絶たず、日本での研究に非常に高い関心を持っていることが感じられました。

http://jsps-th.org/2014/09/05/1642/

【Prof. Dr. Hossain 同窓会長】

インドネシア・ウダヤナ大学（9 月 20 日）

【ウダヤナ大学】

ウダヤナ大学は 1962 年にインドネシア・バリ州に設立された国立大学です。現在 1,800 名の学生と 18 の学部プログラム、12 の大学院プログラムを有しています。インドネシア国内の大学ランキングでは 15 位に位置づけられ、研究分野としては特にバイオテクノロジー、医科学、社会科学及び観光学分野で特に研究成果を上げています。

本事業紹介は国際学会である「The 5th International Conference on Biosicence and Biotechnology」の一環として開催され、日本から山口大学、秋田大学が参加しました。

山口大学から、山田守教授・農学部長が基調講演をされました。同大学は、ウダヤナ大学と大学間学術交流協定を 2010 年に締結しており、山口大学バリ国際連携オフィスを設置しています。山田教授は JSPS 研究拠点形成事業採択プロジェクト「バイオ新領域を拓く熱帯性環境微生物の国際研究拠点形成」（日本側拠点機関：山口大学、タイ側拠点機関：カセサート大学）のコーディネーターも努めておられ、8 月にタイ学術会議（NRCT）主催 Thailand Research EXPO 2014 でセミナー開催の際には当センター長も出席しました。

秋田大学からは、佐藤陽介学術研究課主査、伊藤慎一 URA が大学紹介及び知的財産権について講演されました。

学会と併催したこともあり、200 名を越える参加者がありました。センター長の挨拶で、日本に関心がある方に手を上げるようにいうと、会場の多くの方から手が上がりました。事業紹介後の質疑応答では、フェローシップの受け入れ大学について、ポスドクの年齢制限、JSPS の国際交流事業の資金の内容と言った具体的な質問が相次ぎました。

【事業説明を行う副センター長】

【ウダヤナ大学長からの記念品授与】

日本留学の関心も高く、学部、大学院留学のための奨学金情報についても質問が相次ぎました。

JSPS と秋田大学がセッションのモデレーターは、ウダヤナ大学前副学長の I Gede Putu Wirawan 教授と秋田大学髙樋准教授に担当頂きました。髙樋准教授には、バンコクセンターのカントリー・レポートのコーディネーターも務めて頂いています。

http://jsps-th.org/2014/09/20/2474/

Thailand Research Expo2014 にて JSPS-NRCT セミナー主催（8 月 8 日）

Thailand Research Expo は NRCT が毎年主催し、国内外の研究者による学術セミナーが行われます。当センターは、2009 年の開催初年度より毎年日本から講演者を招聘し、NRCT とセミナーを共催してきました。

今年は”Learning: The Treasure within-Learning to know, to do, to be and to live together”をテーマに日本より京都造形芸術大学・本間正人教授、前気仙沼市教育委員会副参事・及川幸彦氏、金沢大学・鈴木克徳教授の 3 人の講師を招きセミナーを行い、100 名を越える参加者がありました。

【左より Dr. Jitti、鈴木教授、及川氏、NRCT Kristhawat 事務次長、本間教授、山下センター長、JSPS 加藤国際事業部長】

【セミナー参加者にインタビューを行う本間教授】

本間教授は、”Learnology” – toward creation of Learning Planet”と題して生涯を通して「学ぶこと」について講演されました。参加者同士のペアワークを挟みながらの講演で、会場は大いに盛り上がりました。

及川氏は、宮城県気仙沼市における持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）を取り入れた教育を紹介し、この教育方針が東日本大震災直後の地域復興を後押ししたことについて講演されました。気仙沼市では子供たちが ESD で学んだことを生かし、震災直後に積極的に地域の被災者を支える活動を行い、人々の精神的な支えとなりました。この話にセミナー参加者は大きな感銘を受けました。鈴木教授は、”ESD”という概念の生まれた背景や定義について、また世界各地で行われている様々な ESD の取り組みについて話されました。

タマサート大学社会行政学部 Dr. Jitti Mongkolnchaiarunya 助教のユーモアを交えた司会も相まって、非常に活気のあるセミナーとなりました。

http://jsps-th.org/2014/08/08/1245/

JSPS 研究拠点形成事業プロジェクト（山口大学）The 1st Joint Seminar 開会式出席（8 月 10 日）

NRCT 主催「Research Expo 2014」に合わせて開催された JSPS 研究拠点形成事業採択プロジェクト「バイオ新領域を拓く熱帯性環境微生物の国際研究拠点形成」Joint Seminar のオープニングセレモニーに山下センター長及び、JSPS 東京本部より辻修子国際協力員出席ました。

プロジェクトの日本側コーディネーターは山口大学医学系研究科、山田守教授が務めていらっしゃいます。タイ（カセサート大学）、ベトナム（カントー大学）、ラオス（ラオス国立大学）、ドイツ（ベルリンポイトエ科大学）、インドネシア（プラビジャヤ大学）、イギリス（マンチェスター大学）のコンソーシアムで実施されるもので、今回のセミナーには、これらの大学から 180 名程の研究者及び大学院生が参加しました。

Vudtechai Kapilalanchana カセサート大学長の歓迎挨拶、三浦房紀山口大学副学長の主催者挨拶の後、支援機関を代表して、山下センター長並びに Kristhawat Nopnakeepongse・NRCT 事務次長が祝辞を述べました。セミナーは 2 日間に渡って開催され、この事業の目的である熱帯微生物の有効活用を通して食糧確保、健康、エコシステムの保全さらにはバイオビジネスの展開などのテーマで研究発表が行われました。

本プロジェクトでは、2014 から 2018 年の 5 年間の実施期間中、毎年、合同セミナー、若手研究者セミナー、ワークショップなどを、主に日本とタイで、また、サテライトセミナーを加盟大学の持ち回りで開催する予定です。

http://jsps-th.org/2014/08/10/2094/

JSPS 研究拠点形成事業プロジェクト（京都大学）シンポジウム・ワークショップ出席（9 月 28 日）

ベトナムのカントー大学で、JSPS 研究拠点形成事業「インドシナ地域における地球環境学連携拠点形成」のシンポジウムとワークショップを京都大学が開催し、山下センター長が出席し JSPS の国際事業を紹介しました。

会場となったカントー大学図書館ホールには、ベトナム、タイ、マレーシア、ラオス、カンボジア、インドネシアそして日本から 100 名を超える研究者、大学院生が参加しました。JSPS の国際事業の紹介に先立ち、山下センター長が前日の夕刻に発表された「スーパーグローバル大学創生支援事業」に京都大学が選ばれたお祝いを述べると、会場全体が拍手の渦に包まれました。

参加者に若手研究者が多くいたこともあり、JSPS 国際事業の中でも特に論博事業や外国人特別研究員事業について多くの質問がありました。

http://jsps-th.org/2014/09/28/2496/

タイ科学技術展出展（8 月 12 日～28 日）

タイ科学技術展は国民の科学技術への関心を高めるためにタイ科学技術省及びタイ国立博物館が毎年主催し、例年 100 万人以上が来場する科学技術に関するタイの最も大きなイベントです。

例年はバンコクで開催されますが、今年はチェンマイで開催されました。タイ国内の研究教育機関や企業のほかインターナショナルパビリオンでは日本、中国、イギリス、ドイツが出展し、科学技術開発の成果を展示しました。

日本パビリオンには国際農林水産業研究センター、国際協力機構、東京大学等の宇宙・地理空間技術による革新的ソーシャルサービス・コンソーシアム（GESTISS）、リモート・センシング技術センター、北海道大学、東海大学、JSPS バンコク研究連絡センターが参加し各機関のプロジェクトや活動を展示しました。当センターはタイにオフィスを設置する日本の 30 の高等教育機関の紹介ポスターを展示しました。

【JICA による展示説明】

8 月 14 日は科学技術展の開所式に出席するとともに、当日ブースを訪問した在チェンマイ藤井昭彦総領事、日本ブースを訪問したタイ科学技術大臣に対して、日本の関係各機関とともに展示説明を行いました。当センターのブースには日本での研究に関心のある研究者や日本の大学に関心を持つ学生やその引率教員も数多く訪れ、当センターはポスターを活用しながら各大学の特徴やタイとの教育研究連携について説明しました。

ポスターを提供頂いた大学は下記の通りです。

秋田大学、青山学院大学、大阪大学、関西大学、京都大学、京都工芸繊維大学、九州大学、国立高等専門学校機構、静岡大学、首都大学東京、千葉大学、中央大学、デジタルハリウッド大学、電通大学、東海大学、東京大学、東京医科歯科大学、東京工業大学、東京農工大学、東洋大学、長岡技術科学大学、名古屋大学、福井工業大学、福岡工業大学、文化学園大学、三重大学、宮崎大学、明治大学、立命館アジア太平洋大学、早稲田大学（以上、五十音順）

http://jsps-th.org/2014/08/12/1239/

【JSPS ブースで日本の大学ポスターに集まる高校生】　【副センター長と在チェンマイ藤井総領事（右）】

JASSO 主催「日本留学フェア」出展（8 月 31 日）、JASSO 米川理事の来訪（9 月 1 日）

バンコク市内で開かれた JASSO 主催「日本留学フェア（タイ）」に出展しました。日本の大学や日本語学校、また日本大使館などの政府関係機関も含め 100 近くの機関がブースを出展し、日本留学に関する情報発信や相談受付を行いました。昨年の来場者を 500 名以上も上回る 2,909 名が来場しました。

当センターは、JSPS 国際事業の紹介や資料配布、またフェローシップ事業の申請方法の相談に対応しました。当イベントの来場者は、日本の大学学部や大学院への留学を希望する高校生や大学生が中心ですが、研究者も参加しており、40 名が当センターのブースを訪れました。

また各大学の出展ブースを訪問し、JSPS バンコク研究連絡センターの紹介を行い、タイで日本の大学が活動する際の連携も呼びかけました。

【左から轟国際協力員、山田副センター長 JASSO、山本専門職員、米川理事、山下センター長、JASSO 佐藤職員、伊部主任】

翌 9 月 1 日、当フェアに出席された日本学生支援機構・米川英樹理事が当センターを訪問されました。

タイでは大学院等で日本に留学した学生が、博士号取得後に JSPS 外国人特別研究員として再来日する事例が多くあり、日本留学がその後の日本での研究活動や二国間共同研究等に結びついているといえます。JASSO は日本留学、JSPS は若手研究者の育成や共同研究の支援を担っていますが、今後も当センターは JASSO との連携を継続し、日本とタイの学術交流の発展につなげていきたいと考えています。

http://jsps-th.org/2014/08/31/1548/

キングモンクット工科大学トンブリ（KMUTT）Japanese Day 2014 に出展（9 月 15 日）

本イベントは、KMUTT が開催する「International Fun Fair」の一環として実施されたもので、当センターからは副センター長、リエゾンオフィサーの二名でブース出展しました。また在タイ日本大使館、日本学生支援機構（JASSO）、大阪大学、東海大学、東京工業大学、福井工業大学、早稲田大学などの大学の他、民間企業の参加もありました。

午前 11 時から開始された本イベントは、Dr. Anak Khantachawana 国際交流担当総長補佐、また関達治研究担当アドバイザー（前大阪大学バンコク教育研究連絡センター長）の挨拶から始まり、ステージで日本料理教室、元留学生のインタビュー等のイベントを交えながら、日本留学に関する情報発信や相談、また企業のブースも参加し、大変盛況な結果となり、1,000 名以上の来訪者がありました。KMUTT の学生数が 20,000 名なので、5%以上の来訪があったことになります。

ブース来訪者は最終的に 52 名でした。JSPS 国際事業の紹介や資料配布、また、フェローシップ事業の申請方法の相談に対応し JSPS の事業を知ってもらう良い機会となりました。

http://jsps-th.org/2014/09/15/2416/

在タイフィリピン大使館訪問（7 月 2 日）

【Edgar B. Bagajos 公使兼総領事と山下センター長】

バンコクセンターとして初めて在タイフィリピン大使館を表敬訪問し、Edgar B. Bagajos 公使兼総領事と対談しました。山下センター長より JSPS の概要とセンターの役割、JSPS フィリピン同窓会（JAAT）の活動について紹介しました。

同会は、論博事業で博士号を取得した研究者が中心となり、科学技術省（Department of Science and Technology（DOST））の支援を受け、2005 年に設立されていた組織が、2013 年に外国人研究者招へい事業などのその他の事業経験者も会員に含めて JSPS の公認同窓会として設立されました。設立当初よりシンポジウム開催のほか社会や若者に対して科学技術を広めるアウトリーチ活動を実施しています。

Edgar B. Bagajos 公使兼総領事は、フィリピンの学生の多くは自然科学分野を敬遠する傾向にあるが、フィリピンの発展のためには科学技術に強い人材の育成が求められており、フィリピンの若者の科学技術への関心を高めてほしいと、JSPS フィリピン同窓会の活動に期待を示されました。

また、今後フィリピンとタイの研究者が交流する機会があれば、フィリピン大使館としても支援していきたいと、今後の連携にも意欲を示されました。これに対して JSPS バンコクセンターとしてもフィリピン研究者がタイの研究者と交流したい場合は、JSPS タイ同窓会のネットワークを活用して協力したいと伝えました。

ASEAN 経済共同体の発足が 2015 年に迫る中で、ASEAN 域内での学術交流の機運が高まっています。日本の大学や研究者もその交流ネットワークの中に参加していけるよう、当センターも JSPS 国際事業の情報発信と所管エリアでの同窓会活動の支援によりいっそう力を入れて行きたいと考えています。

http://jsps-th.org/2014/07/02/1032/

在タイバングラデシュ大使館（7 月 3 日）訪問

Kazi Imtiaz Hossain 大使及び Azizur Rahman 総領事に対し、山下センター長より JSPS の概要と国際事業、バンコク研究連絡センターの機能と JSPS バングラデシュ同窓会の活動について紹介しました。

外国人特別研究員事業において、バングラデシュの若手研究者が毎年 10 名以上採択され、採択者数全体の 5%を占めています。また、バングラデシュの大学には博士号を持たずに大学で職に就いた教員も多いため、論文博士号取得希望者に対する支援事業の需要も多いようです。

さらに、同国では食糧安全保障対策が喫緊の課題ですが、JSPS バングラデシュ同窓会員には農学分野の研究者が多く JSPS 国際事業を活用して農学分野の研究者が育成されています。

【左から轟国際協力員、Buabchamanee リエゾン･オフィサー、Hossain 大使、山下センター長、Rahman 総領事】

Hossain 大使は、これらの JSPS 事業の実績を踏まえて、日本の研究支援は国を限定せず、直接的な見返りを求めない長期的な投資であると述べ、JSPS の人材育成を評価されました。

一方でバングラデシュの研究者は、研究資金が必要でもそれを獲得するための情報に十分にアクセスできていないため、バングラデシュで JSPS 国際事業の情報を発信してほしいと、当センターの活動に期待を示されました。

http://jsps-th.org/2014/07/03/1036/

JSPS カントリーレポート第 1 回調査ヤンゴン市内の関係機関訪問（7 月 29 日）

日本学術振興会（JSPS）は、海外研究連絡センターの情報収集機能活用の一環として、センターにおける学術動向調査として、平成 26 年度からセンターにおいて、カントリーレポートを作成することとなりました。バンコク研究連絡センターにおいて、今回はミャンマーを対象とし、当該国の高等教育及び学術の実情や最近の動向について調査を実施することとし、秋田大学教育文化学部高樋さち子准教授にコーディネーターを依頼し調査を実施しています。

【ヤンゴン大学を訪問、Aung Thu 学長と】

今回 7 月 27～29 日に実施した第 1 回目の調査では、ヤンゴン市内にある UNICEF ヤンゴンオフィス、在ミャンマー日本大使館、ヤンゴン工科大学、JICA ミャンマー事務所、ミャンマー教育省高等教育局、ヤンゴン大学を訪問しました。

調査を終えて、ミャンマーの高等教育政策のおおよその現状が把握することが出来ました。大体の教育関係者の認識は共通であり、ポイントとしては以下の通りまとめられます。

- 現在、ミャンマーの大学は各省庁の縦割り管轄であること。
- ミャンマー教育基本法が国会で審議されており、成立したら高等教育政策も大きく変化する予定である。ミャンマー教育基本法は 2014 年 9 月 30 日に成立した。

ヤンゴン工科大学元学長 Nyi Hla Nge 教授と

- 高等教育については、現在の縦割り管轄から、評議会のような管轄機関を置き、その下に所属する形となる。その際、大学の自治、人事財政の権限付与、学問の自由が保証される予定。
- そうなった場合、大学の予算はどういった形で政府から下りてくるのか、政府からの交付金等の制度がどうなるのかは、まだまだ調整に時間を要すること。

今後もミャンマー教育基本法の制定後、引き続き調査を実施します。次回の現地調査は 2015 年 1 月に実施し、合わせてヤンゴン大学で JSPS 事業説明会を開催予定です。

【Unicef ヤンゴンオフィスにて】

http://jsps-th.org/2014/07/29/1156/

バングラデシュ科学アカデミー（BAS）、バングラデシュ大学助成委員会（UGC）訪問（9月6日）

バングラデシュ科学アカデミー（BAS）は基礎から応用科学の発展及びその実践を通じて、国家の繁栄を図ることを目的として1973年に設立されました。これまで国内では著名研究者の集結する第一級の科学機関として、また国際的にはバングラデシュを代表する研究機関として科学の発展に寄与してきました。また、HOPEミーティングの推薦機関として、2009年の第二回から国内の優秀な大学院生を本会議に推薦しています。

この日は折しも安倍晋三首相がバングラデシュを訪問する日と重なり、街中に日本に対する友好ムードが広がる中会見が行われ、Prof. Dr. Mesbahuddin Ahmad会長をはじめ、バングラデシュを代表する研究者である理事に参加頂きました。前BAS事務局長で、前JSPSバングラデシュ同窓会長であるProf. Dr. Naiyyum Choudhury、Prof. Dr. M. Afzal Hossain現同窓会長、Dr. Nur A Khondaker事務局長にも出席いただきました。

【Ahmad会長と握手を交わすセンター長】

Ahmad会長より安倍首相の訪問に合わせて、日本ーバングラデシュ間の長期間に渡る友好について言及がありました。Choudhury前会長から同窓会のこれまでの経緯について、またセンター長からJSPSの概要及びプログラムを紹介しました。

バングラデシュ大学助成委員会（UGC）は高等教育の質強化を目的として1972年に設立された機関で、JSPSとは1993年にMOUを締結し、研究者交流、共同研究、論文博士号取得プログラムの推薦を担当してきました。（研究者交流は2004年度の交流をもって廃止、論博プログラムの推薦機関としての役割は2014年度をもって終了）

【Chowdhury委員長（左）とセンター長】

今回の訪問は、Hossain同窓会長の紹介で訪問が実現し、UGC委員長（国務大臣相当）のDr. Abul Kalam Azad Chowdhuryに面会しました。Chowdhury委員長は、バングラデシュの科学技術の発展のためにJSPSとの更なる連携の必要性を強調、二国間交流事業やフェローシッププログラムの更なる支援について要請されました。当センターからも、JSPS同窓会と共同で今後も様々な連携を図っていくことを確認しました。

http://jsps-th.org/2014/09/06/1650/

インドネシア科学院（LIPI）（9 月 18 日）、インドネシア教育文化省高等教育総局（DGHE）訪問（9 月 19 日）

JSPS の対応機関であるインドネシア科学院（LIPI）、インドネシア教育文化省高等教育総局（DGHE）は、1978 年より JSPS と交流を開始しており、対応機関の一つとして、JSPS 二国間交流事業を実施しています。また、かつては論文博士号取得支援事業のインドネシア国内からの推薦も行っていました。(2014 年から各国からの推薦制度を廃止)

Prof. Lukman Hakim 理事長（Chairman）以下幹部が出席され、1)インドネシアにおける JSPS 同窓会の設立の可能性について打診、2) 11 月にバンコクで開催されるアジア学術振興機関長会議（Asian Heads of Research Councils, ASIAHORCs)の協力要請について議論しました。

【センター長向かって左が Hakim 理事長、右が Subiyanto 教授】

同窓会設立については、昨年 11 月インドネシア・バリで開催された ASIAHORCs の際、センター長と会談し、同窓会の設立に意欲を見せていた Prof. Bambang Subiyanto（JSPS フェローで京都大学で Ph.D.取得）が中心となり、ワーキンググループを立ち上げることになりました。なお、この WG には、DGHE の代表も加え、両者で構成することを提案し、了承されました。11 月末にバンコクで開催される ASIAHORCs には、Lukman 理事長が参加される予定とのことで、その折に進捗状況について確認する予定です。

最近は韓国や EU からの資金提供が増え、相対的に日本のプレゼンスが低くなっており、それを打破するためにも共同研究プログラムを増やすことが必要だとの要望がありました。インドネシアも近年は大学数が 100 を超え、高等教育が充実しつつあるものの、まだまだ研究レベルは高いとは言えず、実験施設の整備を中心に支援が必要とのことでした。

インドネシア教育文化省高等教育総局（DGHE）の訪問では Djoko Santoso 局長、また Hermawan K. Dipojono バンドン工科大学教授と面会しました。

インドネシア JSPS 同窓会の結成について、Santoso 局長に伝えたところ、DGHE からの協力についても同意頂き、LIPI の Lukman 理事長に連絡するとの回答を頂きました。今後は、窓口の Subiyanto 教授と連絡を取り合いつつ、支援していく予定です。また DGHE が主催する大学の学長もしくは研究担当副学長が一堂に会する会議で、JSPS 事業説明会実施の要望を伝えたところ了承され、次回開催の案内を頂けることとなりました。

【左から Dipojono 教授、Djeko 局長、センター長、副センター長】

http://jsps-th.org/2014/09/19/2484/

ＪＳＰＳ同窓会情報

バンコク研究連絡センターは、JSPS 国際交流事業で訪日経験のある研究者の組織である「JSPS 同窓会」の支援も積極的に行っており、現在、管轄地域内ではタイ・バングラデシュ・フィリピンに JSPS 同窓会が組織されています。

JSPS フィリピン同窓会・総会及びシンポジウム開催（7 月 11 日）

デ・ラサール大学（De La Salle University Manila）で JSPS フィリピン同窓会（JAAP）第 2 回シンポジウム“HEALTH and the ENVIRONMENT”を開催し 80 名が参加しました。Dr. Raymond Tan デ・ラサール大学研究担当副学長が挨拶を述べ、亀井武 JSPS 人物交流課長、北川達生在フィリピン日本大使館参事官、Prof. Fortunato T. Dela Pena フィリピン科学技術省(DOST)次官が祝辞を述べました。

【会場からの質問に答える齋藤教授】

基調講演は、明治薬科大学生命創薬科学科教授の齋藤直樹教授に「Chemistry of Antitumor 1,2,3,4 -Tetrahydroisoquinoline Marine Natural Products」を演題として実施頂きました。齋藤教授は、海洋生物資源からの創薬開発研究に関する生物資源調査（Bioprospecting）を実施されています。以前 JSPS アジア・アフリカ学術基盤形成事業を実施された時の研究内容を踏まえ、国際的な共同研究、また基礎研究を推進することについてのの重要性について講演いただきました。

【講演される Montoya　JAAP 次期会長】

JAAP からはフィリピン保健研究開発評議会長の Dr. Jaime Montoya、同窓会理事で Technological Institute of the Philippines 教授の Dr. Custer Deocaris、ミンダナオ州立大学イリガン工科校(Mindanao State University, Iligan Institute of Technology)の Dr. Evelyn Creencia が講演を行いました。

引き続き、第二回 JSPS フィリピン同窓会総会が実施され、新同窓会理事選挙が行われ、会長に Dr. Jaime Montoya、副会長は現同窓会監査役でデ・ラサール大学の Susan M. Gallardo が副会長、事務局長にはセントラル・ルソン州立大学の Dr. Renato G. Reyes、会計に現副会長の SEAFDEC の Dr. Maria Rowena Eguia、広報に現同窓会理事でフィリピンカラバオセンターの Dr. Danilda H. Duran が選出されました。

http://jsps-th.org/2014/07/11/1063/

JSPS フィリピン同窓会とともにフィリピンの研究施設訪問（7 月 12 日・13 日）

東南アジア漁業開発センター(SEAFDEC) Binangonan Freshwater Station

マニラから車で 2 時間強のラグーナ県(名前のとおり大きな干潟というか湖がある)にある東南アジア漁業開発センター(SEAFDEC・South East Asian Fisheries Development Center) Binangonan Freshwater Station を訪問しました。SEAFDEC は JSPS フィリピン同窓会の Dr. Ma. Rowena R. Eguia が所属する機関であり、JSPS アジア・アフリカ学術基盤形成事業にも 2011-14 年の間参加しました。

【SEAFDEC 内の研究施設】

【山下センター長に説明する Dr. Aya】

フィリピンの SEAFDEC の施設は 4 つありますが、Binangonan Freshwater Station は主に淡水魚の養殖技術を開発し、地元の漁民の所得向上のための技術指導なども行っています。

研究所を案内頂いた Dr. Frolan A. Aya は国費留学生で北海道大学で博士号を取得されました。JSPS の招へい事業に関心があるとのことでしたので、事業の概要を説明しました。

http://jsps-th.org/2014/07/12/1130/

国立フィリピン大学ロスバニョス校内、フィリピンカラバオセンター (PCC)

カラバオとは、タガログ語での水牛を意味します。同センターでは、ミルク（牛乳）の多くをオーストラリアから輸入しているフィリピンの現状をカラバオの乳で代替することや、牛肉より美味なカラバオ肉を生産する研究をしています。Dr. Arnel del Barrio センター長に迎えていただき、日本との共同研究などについて情報交換を行いました。

同センターは島根大学、三重大学などとの連携も進めており、JSPS 拠点形成事業や日本の多くの大学が着手している「大学発の起業」などに関心が示されました。

【PCC のメンバー、前列中央が Dr. Arnel】

【PCC からの説明】

畜舎も見学し、カラバオの品種改良の様子等を見ることも出来ました。

地方の研究の現場を見学することには大いに意義がありました。いずれの研究機関においても、JSPS の論博プログラムや外国人特別研究員に関心のある若手研究者が在籍しており、JSPS 事業に対する需要を感じました。

http://jsps-th.org/2014/07/13/1144/

JSPS タイ同窓会・JAAT-JSPS-NRCT セミナー開催（8 月 8 日）

JSPS タイ同窓会（JAAT: JSPS Alumni Association of Thailand）は、タイ学術会議（NRCT）の協力の下学術セミナー”Long life without cancer”を開催し、当センターは、日本人記帳講演者の招聘など行い、本シンポジウムを共催しました。

セミナーでは Prof. Dr. Sunee Mallikamarl JSPS タイ同窓会長がチェアパーソンを務め、日タイ三名の研究者による講演が行われました。

日本から国立がん研究センターの牛島俊和主任研究員が“Live longer without bad cancer”をテーマとして、がん転移のメカニズムやがん遺伝子・がん抑制遺伝子の働き、生活習慣とがん罹患率の関連、がんの種類（悪性のものとそうでないもの）、がんを防ぐために心がけるべきことを講演されました。特にがん予防については、タイ人が気をつけるべき点についても言及され、来場者は熱心に聴き入っていました。

【講演される牛島主任研究員】

Dr. Danai Tiwawech JSPS タイ同窓会事務局長、の講演は、タイ語で実施されました。Dr. Danai は、タイ国立がん研究所の主任研究員を務めておられ、｢Genes and proteins for cancer detection and prevention｣ を演題として、がんの発見と予防についてご講演いただきました。

Dr. Danai は講演者としてだけでなく、牛島主任研究員の招聘からプログラムの構成まで JAAT セミナーをオーガナイズしていただきました。

【Dr. Danai による講演】

【Dr. Wichet の講演】

マヒドン大学薬学部の Wichet Leelamanit 助教は「Thai-herb and cancer treatment」をテーマとして講演されました。がんの原因として一番多くを占めるのは食事と生活習慣で、70%の要因となっており、遺伝的な要因は 10%、ウィルス、環境といったものは 10%以下になるとのことで、その上で、がんを予防するためにどういった食物を摂取すべきであるか、また各食物の効用についても述べられました。ユーモアたっぷりのプレゼンテーションに会場は大いに盛り上がりました。

昨今、タイにおいて健康への関心が非常に高まっており、今回のタイムリーな講演テーマも相まって、100 名を超える参加者がありました。

http://jsps-th.org/2014/08/08/1224/

JSPS タイ同窓会・理事会開催（7 月 2 日）

今回はオブザーバーとして JSPS 及び NRCT、またチェンマイ、コンケンの代表として、チェンマイ大学の Dr. Sirikan 先生、コンケン大学の Dr. Kittisak 先生に参加頂きました。オブザーバーという資格にはなりますが、同窓会総会の承認を経て、今後は各地域代表の理事として理事会に参加頂く予定です。Dr. Sirikan、Dr. Kittisak にはオブザーバー参加にもかかわらず、同窓会運営について様々な提言を頂きました。

今回の会議では、2014 年度第一回理事会の議事録の承認、8 月 8 日に実施の NRCT Research EXPO の進捗状況、JAAT ロゴのデザイン、JAAT ウェブサイトの作成について議論しました。また、Sunee 会長からは、前回の理事会で議論された在タイ日本国大使の名誉会員への就任について了承があった旨、出席者に報告がありました。

【理事会出席者】

http://jsps-th.org/2014/07/02/1823/

バングラデシュ JSPS 同窓会・理事会開催（9 月 5 日）

午前中に開催された JSPS 事業説明会に引き続き、同日午後に JSPS バングラデシュ同窓会理事会がバングラデシュ農業大学で開かれ、センター長、副センター長、国際協力員が参加しました。BJSPSAA シンポジウムの実施概要について理事の間で活発な議論が繰り広げられました。

決定した事項は以下の通りです。

時期：2015 年 1 月下旬ごろ

場所：バングラデシュ農業大学

テーマ：Safe Food, Healthy Nation

日本から招聘する講師：3 名

シンポジウムテーマ”Safe Food, Healthy Nation”は、食糧安全保障の問題を抱えるバングラデシュにとって非常に重要なテーマです。理事会では今後、日本人講師の選定も含め、シンポジウムのコンテンツについて議論を重ねていく予定です。

http://jsps-th.org/2014/09/05/1671/

タイには日本の高等教育機関や研究機関の事務所が数多く設置されています。今回はその中から**一般財団法人リモート・センシング技術センター（RESTEC）本澤雅彦主任研究員**にご寄稿いただき、同機関の活動を紹介していただきました。

一般財団法人 リモート・センシング技術センター
タイ駐在代表　本澤雅彦主任研究員

1. はじめに

リモートセンシング（Remote Sensing）とは、「物を触らずに調べる」技術です。
人工衛星や航空機に搭載された計測装置（Sensor）は、地球上の海、山、平野、森、都市、雲などからの反射や、自ら放射する電磁波を観測します。この技術を用いて以下の事が分かります。

植物の有無（森林伐採、砂漠化、農作物（水田）の状況）

地表の温度（ヒートアイランド現象・海面の温度、 黒潮の蛇行、エルニーニョ現象、漁場予測）

地表の高さ（地形図の作成、3D マッピング、鳥瞰図）

大気の状態（雲の分布、天気予報、雨の強さ、台風の内部状況、エアロゾル、オゾン層）

水の有無（ダムの貯水量、水害の被災状況、水稲の作付け面積）

海洋の状況（海流、海氷、赤潮、沿岸災害）

この様にリモートセンシング技術は各分野に応用することができます。

2. RESTEC の概要

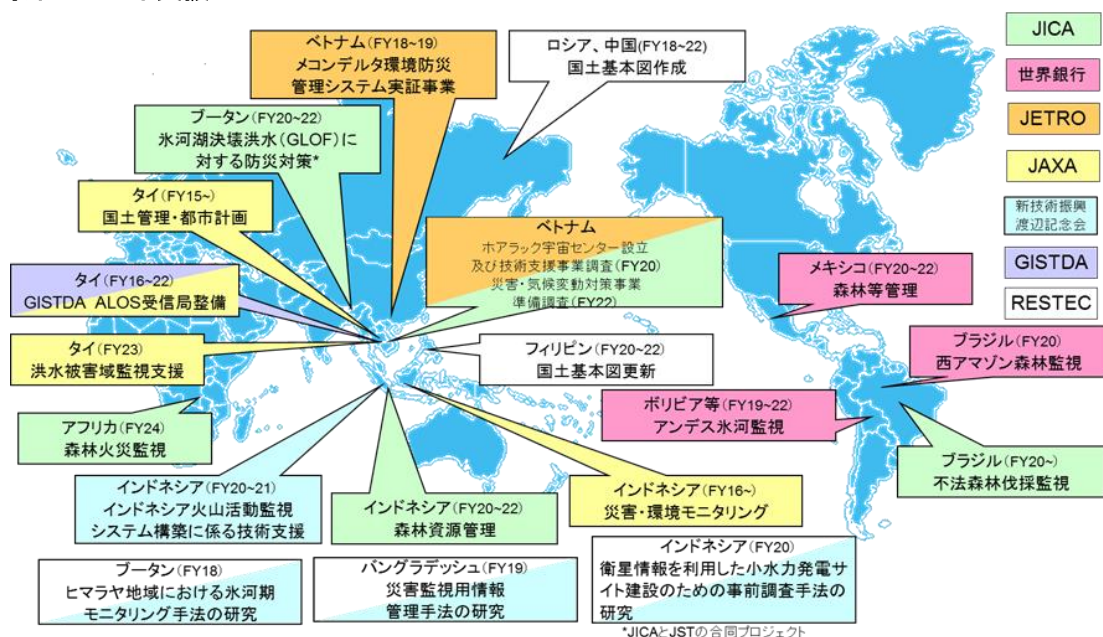
○設立：
1975 年 8 月 1 日（財団法人）

○移行：
2011 年 8 月 1 日（一般財団法人）

○目的
（1）リモート・センシングに関する基礎的且つ総合的な研究開発

（2）リモート・センシングその他の宇宙開発利用に関する普及啓発

（3）これらを通じ社会経済の発展及び国民福祉の向上に寄与

3. 海外での主な支援

4. RESTEC の東南アジアでの活動

1993 年に海外初の衛星観測運用業務として、タイの郊外ラカバンの GISTDA（地理情報宇宙技術開発機構）の地上局に駐在員を派遣したことから始まります。主な業務は以下の通りです。

（1）1993 年 4-1999 年 3 月：タイ地上局運用業務（MOS-1、JERS-1）
（2）1997 年 11 月-2008 年 3 月：タイ、インドネシア地球観測衛星実利用パイロット事業（JERS-1、ALOS）
（3）2006 年 4 月-現在：宇宙技術利用防災管理業務（センチネルアジア）
（4）2013 年 2 月：アジア６カ国 ALOS-2 利用研修（ラオス）
（5）2014 年 2 月：アジア 9 カ国 ALOS-2 利用研修（ラオス、カンボジア）
（6）2010 年 1 月-2012 年 3 月：ALOS-THEOS 利用検証プロジェクト（タイ）
（7）2012 年-現在：大学とのネットワーク構築（AIT、タイ、ミャンマー、ラオス、カンボジア、インドネシア）

タイの参加機関：
王立灌漑局（RID）、王立森林局(RFD)、水産局（DOF）、農業経済局（OAE）、自然公園野生動植物保護局（DNP）、タイ電力公社、王立測量局（RTSD）、公共事業･都市農村計画局（DPT）、鉱物資源局（DMR）、災害低減局（DDPM）、土地開発局（LDD）、カセサート大学（KU）、チュラロンコン大学(CU)

MOU 締結：
2001 年 9 月：GISTDA（地理情報宇宙技術開発機構）
2012 年 8 月：AIT（アジア工科大学院：Asian Institute of Technology）

【AIT：地球観測技術分野での連携（MOU 締結）】

5. おわりに

【タイ・ランシット大学：気候変動・災害監視研究での連携（左から広島大学、東京工業大学、ランシット大学、千葉大学、RESTEC)】

日本の衛星リモートセンシング技術を利用したプロジェクトを通じて、日本の地球観測衛星データがタイおよび東南アジアの政府機関・大学で広く利用されてきております。
各分野別のリモートセンシング技術の利用も進んでおり、特に、「災害監視・減災」が現在の重要課題としております。

2011年の東日本大震災、タイ大洪水は、自然災害が社会・経済とって大きな脅威であることを多くの人々に知らしめました。来るべき自然災害への監視・減災への取り組みには、自然災害発生のメカニズムの解明のための研究・開発も必要です。これらのプロジェクトを持続させるためには、政府機関—大学間の組織間の連携、研究・開発の人的リソース・ネットワークの強化が重要です。

さらに、新たな利用分野の開発も進めており、感染症への応用として、①発生源（蚊、ねずみ等）の生息環境（気温、降水量、植生等）の変化を監視、②発生地域の地理的分布、変遷の把握等にリモートセンシング技術を利用するプロジェクトを進めております。この試みは、対象物の大きさに依存しない新たな取り組みです。

【ラオス・ラオス国立大学　環境分野での連携】

今後とも、リモートセンシング技術は、種々の研究課題への解決技術として、利用される事を期待しておりますので、ご興味のある方のご連絡をお待ちしております。

【インドネシア・ウダヤナ大学：海洋・水産学研究での連携】

問い合わせ先

本澤雅彦
主任研究員、タイ駐在代表
一般財団法人 リモート・センシング技術センター
c/o JAXA Bangkok Office, B.B.Building 15Flr.Room No.1502, 54 Asoke Road, Sukhumvit 21, Wattana, Bangkok 10110, Thailand.
Tel: +66-2260-7026, Fax: +66-2260-7027, Mobile: +66-87- 832-6432
E-mail:honzawa@restec.or.jp; mhonzawa@ksc.th.com
HP:http://www.restec.or.jp

センター活動記録

センターには、ASEAN 諸国との学術国際交流を目的として、日本の研究者や高等教育関係者が訪れます。また、日本との学術連携に関心のあるタイの研究者も訪れ、センタからは JSPS の国際事業の紹介や申請方法について助言しています。
詳しい活動記録は当センターホームページ（http://jsps-th.org/）に掲載しております。

7 月

9 日	大阪大学工学研究科櫻井英博教授及び分子科学研究所山本浩史教授の来訪
19 日	タイ福岡 OB 会発会式に参加
23 日	名古屋大学 Kampeeraparb Sunate バンコク事務所副所長、Veeraya Chenchittikul バンコク事務所特任助教の来訪

8 月

5 日	京都大学東南アジア研究所三重野准教授、清水教授の来訪
6 日	広島大学堀田泰司副理事の来訪
15 日	キングモンクット工科大学ラカバン(KMITL)工学部の Nunthawath 助教、東海大学工学部山本教授、梶田准教授の来訪
20 日	明治大学政治経済学部加藤久和教授の来訪
26 日	ASEAN University Network、岡山大学スタディーツアー「Study and Visit Thailand: “Discovery, Diversity, Dynamics”」の来訪

9 月

1 日	愛和外語学院　坂本学生課長の来訪
1 日	上智大学グローバル教育推進室　杉本一久さんのご来訪
1 日	JASSO 米川理事の来訪
2 日	大分大学医学部内田智久助教の来訪
9 日	明治大学 ASEAN センター江藤教授と交換留学生のオフィス来訪
9 日	京都大学 ASEAN 拠点、川口龍馬、 城礼美副拠点長（事務担当）の来訪
17 日	理研シンガポール事務所 津澤元一所長、柿原健一郎コンサルタントの来訪
17 日	日本語パートナーズ派遣壮行会に出席
23 日	AUN/SEED-Net 事務局、渡邊元治、小西伸幸副チーフアドバイザーの来訪
23 日	京都大学 ASEAN 拠点、藤枝絢子、大澤由実副拠点長（リサーチアドミニストレーター）来訪
23 日	日本政府奨学金留学生の壮行会に出席
25 日	東京農工大学　上野智雄教授の来訪

コラム＃１

ブアさんのタイご案内！！最終回

รถคันนี้สีดำ!
この車の色は黒

この車の色は黒：
SPS Bangkok Office

「この車の色は赤」。えーっ！？どう見たって黒じゃない？　なんでこの車の持ち主は「この車の色は赤」なんてステッカーを貼ってるんだろう。車の持ち主か私の目が悪くなっちゃったの？
昨日の朝のこと。近所のお寺で、お供えするご飯を持って列に並んでいた時、一人の男性がお坊さんのところに相談に来ました。「しょっちゅう車で事故をするんです、幸い 、重大事故にはなっていないんですが。」そう言うや否や、近くに停めてある自分の車を指差しました。私までつられてその車に目がいってしまい、うっかり「オーマイゴッド！！」って叫んでしまいました。。。って、心の中でですが。だって、車の周りに小さなへこみやこすり傷がたーくさんあるんだもの。
「あなたは車の取扱説明書をしっかり読んだ方が良いわね。」なんて思っていると、お坊さんがその人の生年月日を尋ねて、「この車の色はツキがないなぁ。」と言いました。それを聞いた私は、「お坊さんそれは違いますよ！取扱説明書を読んだ方がいいに決まってる！」って言っちゃいました、心の中で。
お坊さんにそう言われたその人は、とても落ち込んだ表情になりました。車の塗装を「ツキ」がある色に変えるのにもお金がかかるし、自分の好きじゃない色にするなんて、そりゃ落ち込むよなぁ…。
しかしお坊さんが良い方法を教えてくれました。「この車は XXX 色です、というステッカーを貼りなさい。」と。なるほど！このお坊さんは私にも教えを説いてくれたのです。なぜなら私は今までずっと疑問に思っていたから。このステッカーを貼る意味は？その答えが見つかる前に流行が終わってしまうんじゃない？でも廃れず今でもたくさんの車に貼ってあるのはなんでだろうって。
ようやく分かったこと。それは、みんなふざけて貼ってる訳じゃなく、「ツキ」のある色を選ぶことでやる気を出してる、ということ。お坊さんが良い方法を教えてくれて、その人もホッとしたみたい。
昔の人が言っていた「常日頃からやる気を出して自分を信じていれば、万事うまくいく。」という言葉を信じることが大事なのです.

色と運勢	生まれた曜日							
	日	月	火	水（昼）	水（夜）	木	金	土
名声								
金運								
厄除け								
信頼								
成功								
人気運								
避けるべき色								

これから車を買うみなさんが間違った色のステッカーを選んでお金を無駄にしないように、今日は私が調べてきた「誕生日と色の関係」が分かるチャートをご覧ください。もうすでに自分の車を持っていて、もしその車が「ツキ」のない色だったとしても気にしないでくださいね。ステッカーがあなたを守ってくれるでしょう。お坊さんにも確かめてもらいましたよ。ご覧になっていかがですか？あなたの車は「ツキ」のある色でしたか？もし違ったら。もうお分かりですよね、これからどうすればよいか。ぜひ、自分の色に合ったステッカーを探してみてください。車を買う時は「ツキ」のある色よりも自分が気に入った色を選ぶ人の方が多いかとも思います。他の人に迷惑がかかる訳ではないし、どちらを選ぶのも買う人それぞれの思い次第です。でも「ツキ」のある色を選ぶことで何でもうまくいきそうな気もしますね。ただし、自分がしっかり気を付けておかないと事故は起こるかもしれないので、車でお出かけの際はくれぐれも安全運転で。生まれた曜日については、前号の私のコラムも見てくださいね。

お世話になった皆さまへ
私事で大変恐縮ではございますが、
2014 年９月 24 日付けにて退職することとなりました。
約１年半という短い期間ではありましたが、様々な環境、また多くの皆さまに温かくご指導ご支援頂き恵まれた環境の中で楽しくお仕事をさせていただきました。
本当にありがとうございました。
今後は新しい環境での再スタートとなりますが、明るく楽しく自分のペースで一歩一歩進んでいこうと思います。
どうもありがとうございました！
ブアブーチャーマニー リッタイソン(ブア)

ダイスケさんのダイ好きアジア

愛しのバングラデシュ

マイメンシン川。メコン川を思い出す。

人は果たして一体どのくらいカレーだけを食べ続けて生きることが出来るのだろうか。僕の経験では一週間は大丈夫だった。と言うか一週間以上試していない。基本的にニッポン人はカレー好きなので、野菜カレーラムカレービーフカレーチキンカレーの永遠ループでもたぶんしばらくは生きていける筈だ。

色んな方がバングラデシュに行かれ、そしてバングラデシュからの留学生や研究者に沢山会い、バングラデシュは僕にとって特別な国になった。バンコクにやってきて、行く機会が出来て、もうなかなか会えないと思っていたバングラデシュ人の皆さんに会えるのは本当にうれしい。

今回バングラデシュに来るのは 4 回目なのだが、初めてダッカの外に来ることが出来た。ダッカ市内といえば交通渋滞とリキシャとカオスなのであるが、田舎は本当にのどかで、落ち着いた雰囲気だった。ただ、マイメンシンまで来るのに道路が交通渋滞で 5 時間かかる。これで、次回のシンポジウムはマイメンシンで開催なのだが、本当に大丈夫なのかと思う。

マイメンシンの街と野良牛

マイメンシンからダッカへの帰路

バングラデシュの田舎には野良犬ならぬ野良牛がいる、野良山羊もいる。首輪らしきものはあるので、野良じゃなくて放し飼いかも知れない。子牛がこんなに小さな動物とは知らなかった。田舎の風景はバングラデシュもタイもミャンマーもカンボジアもあんまり変わりなく見えるのは、僕が東南アジアに慣れきってしまったからかも知れない。

ミーティングの時間と場所がころころ変わっても、悪路で死にそうになっても、渋滞がひどくても、滞在期間中ずーっとカレーでも、インターネットが突然繋がらなくなっても、そのときそのときはとても辛いのに、喉元過ぎれば熱さを忘れるというか、少し経ったらまたこの国が懐かしくなってしまうから本当に不思議だ。でもそれはバングラデシュだけではなくて、フィリピンだってタイだって一緒かも知れない。だって、ダイ好きアジアなんだから。

JSPS 同窓生の Ashraf さん、Adam さんと

JSPS バンコク研究連絡センター学術情報 (2014 年 7 月～9 月)

■タイ全国教育水準・質評価局、タイ防衛大学シンクタンクによる大学の質強化への協力

タイ全国教育水準・質評価局（ONESQA）、Prof. Dr. Charnnarong Phornrungrot 局長はタイ防衛大学（NDC）シンクタンクとのタイ教育に関わる議論について発表した。アジアのリーディング大学と比較すると、タイの大学の質は問題がある。決定的な弱点は次の要因にある。1) 政権の交代による首尾一貫しない政策、2) 教育から管理運営に渡る全てのレベルの監督の欠如、3) 質管理の欠如。

多くの新設大学が専門化、カリキュラム管理、学習指導モデルの構築を十分に検討せずに急速に拡大し、大学の収益を上げることに力を入れている。それゆえ、タイ教育省はこれらの大学をタイ国民に相応しい大学に改革するために、大学を質的量的両面から監視管理し質の向上に取り組まなければならない。

また、高校の学力評価テストは生徒の学力を反映していない。例えば、GPAX（高校 3 年間の成績から累計された数値）は大学入学のための一つの要素であるが、高校側は自校の学生を大学に合格させたいため、GPAX の平均値は毎年上昇し、現在全国の平均値は3.00を上回っている。その一方で、大学卒業資格は社会や労働市場の要件を満たしていない。多くの学生は社会で求められる能力や知識を考慮せずに学部を選択するため、卒業後に就職難に陥っている。その一方で、ASEAN 共同体の発足で労働人材や専門家不足が懸念される。

大学卒業後の給与水準を 15,000 バーツとする政策は、個人の収入増加のためには有効だが、職業訓練校の卒業生を増加させるという政策と矛盾している。ASEAN 経済共同体の発足を契機に、タイ産業及び経済界はビジネス拡大のために職業訓練校を卒業した人材を求めている。

（7 月 15 日　タイ教育省）

■第 3 回タイ研究大学サミット 2014”Prelude to World Class Universities”開催

2014 年 7 月 31 日、バンコク国際会議場で第 3 回タイ研究大学サミット 2014” Prelude to World Class Universities”が開催され、Assoc. Prof. M.D. Kamchorn Tatiyakawee 高等教育局長が議長を、高等教育研究推進及び国立研究大学開発プロジェクト事務局長 Prof. Wichai Boonsaeng がモデレーターを務めた。高等教育局長は、本サミットはタイの大学の研究能力を示し、世界の一流大学の一員となる準備の一環として開催したと述べた。知識とイノベーションに基づく研究の推進は、タイの国際競争力を向上させ、産業面でも社会の発展においても有益である。

このサミットは学際的な研究を実施する9大学がクラスターを形成し、アイデアを出し合い、意見交換を実施する場となることが期待されている。現在、9 大学によるクラスターは、農業と食料、健康、産業、エネルギー、環境と天然資源、人文社会科学の6分野が集合し“スーパークラスター”に発展してきた。このクラスター形成で得られた研究成果は、官民両方からの金銭的な支援があれば更に拡大するだろう。本サミットには研究者及び一般市民を含む 2,000 名以上の人々が参加した。

（8 月 5 日　タイ教育省）

■欧米大学の東南アジアブランチキャンパスの人気

アジア人は、世界の大学の留学生数の大部分を占めているが、アジアの経済発展とともに、欧米の高等教育機関がアジアの高等教育市場に乗り出してきている。

中国とインドが欧米の一流大学をひきつけている一方で、東南アジアにブランチキャンパスを設置する欧米の大学も多い。特にマレーシアとシンガポールでは、国の教育レベル向上につながるため、政府が様々な優遇策を取り、ブランチキャンパス設置を後押ししている。

マレーシアは、ブランチキャンパス設置を海外からの投資促進と併せて推進している。ジョホール州のイスカンダル開発計画がその一例であり、さまざまなインセンティブを設けて、海外の大学を誘致している。

ブランチキャンパスは、学生とその親にとっても様々な点で魅力的である。海外へ留学せずとも自国で欧米の一流大学と同レベルの教育を受けることができ、入学についても、国内大学と比較すると難しいものの、親大学へ入学するよりも比較的易しい。さらに、親大学と同じ学位をブランチキャンパスで取得することができる。ブランチキャンパスの学生に対して親大学への1年間の留学プログラムを提供する大学もある。

シンガポールやマレーシアにブランチキャンパスを設置するモナシュ大学、ジェームズクック大学、ニューカッスル大学では、入学者数が過去最高を記録した。

オーストラリア・メルボルンにメインキャンパスを置くモナシュ大学は、2012年に世界各国のキャンパス全体で22,057名の自国以外の学生が在籍し(全学生数の30%)、その多くをマレーシア、中国、インドネシア、シンガポール国籍の学生が占めている。オーストラリア・クイーンズランドに拠点を置くジェームズクック大学も、アジア人学生が全学生数の約半分を占め、シンガポール国籍の学生は全学生の22%に上る。モナシュ大学マレーシア校では、マレーシア国籍の学生は全体の70%を占めており、ジェームズクック大学シンガポール校では30%がシンガポール国籍である。

ブランチキャンパスの入学者数は順調に増加しているが、多くの大学では、今後しばらくアジアでブランチキャンパスの数を増やす計画はないという。今後は数の拡大よりも、教育の質の向上に力を注ぎたいと考えている。

ジェームズクック大学のDale Anderson学長も、「現時点では、他の国にさらにブランチキャンパスを拡大しようとは考えておらず、既存のキャンパスで質の保証された教育を提供していきたいと考えている」と述べており、ジェームズクック大学シンガポールキャンパスは、既存の2つキャンパスを近い将来、一つに統合する予定だ。

マレーシアに医学部ブランチキャンパス(NUMed)を設置する英国のニューカッスル大学も、Prof Ella Ritchie副学長によると同様の方針である。NUMedは、設立当時は2コースだけだったプログラムが7コースにまで拡大し、今年の6月には医学部の第一期生が卒業する予定だ。

モナシュ大学は、1998年、マレーシアブランチキャンパス設立に6,500万USドルを投資し、タイやシンガポールなど、キャンパスを設置していない国からも学生を獲得し、マレーシアキャンパスに呼び込むことに力を注いできた。

学生の入学基準はキャンパス設置国によって異なる。ニューカッスル大学の本キャンパスに入学を希望する外国人学生は、申請書を英国大学入試機関(Universities and Colleges Admission Service (UCAS))を通して大学に提出しなければならない。一方、シンガポールとマレーシアブランチキャンパスに入学を希望する学生は、英語能力と中等教育卒業同等の資格があればよい。ブランチキャンパスで提供される授業の質は、親大学のもの同等であることを大学は保証している。その基準として、ニューカッスル大学シンガポール校の教員のほとんどは英国から派遣されている。シンガポール校で現地採用された教員は少数で、彼らはニューカッスル大学でも教員経験があるか、同大学の教育方針を十分に理解していなければならない。

授業料も魅力の一つでキャンパス所在地に応じた額が設定されている。例えば、モナシュ大学メインキャンパスでは文学部学生の授業料は年間26,300オーストラリアドル(77,350マレーシアリンギ)だが、マレーシアキャンパスでは31,000マレーシアリンギである。

ブランチキャンパスの需要拡大に伴い、今後は様々な大学がアジアでのブランチキャンパス設立参入が予想される。受入国の政府は、これまでに得られた経験を生かし、国内の教育と経済発展のため、さらに海外の大学を誘致するために柔軟な制度作りを進めていくだろう。

(8月25日　Bangkok Post紙)

■タイの職業訓練学校で日本の高専の教育方法を導入

タイ職業教育局(Office of Vocational Education Commission (Ovec))と国立高等専門学校(高専)機構は教育連携のための覚書を締結した。高専は日本に55校あり数百名の留学生を含む52,000人の学生が学んでいる。

高専は、実験と実習、インターンシップおよびコーオプ教育(企業と連携した職業教育)のバランスの取れたカリキュラムが高い評価を受けている。

同覚書は、実践的で創造的な教育と人格形成教育を重視している。同覚書に基づき、高専の教育方法が試験的にスラナリー工科大学とチョンブリーの理工系職業学校で導入される。両校では30人を定員とする高専方式のクラスが開講される。人格形成教育は、学生寮での生活や課外活動を通して行われる。Aganit Klungsang Ovec副事務局長は、この2校での試験的な取り組みを通して、高専の教育の中でタイの社会に適したものを抽出し、多くの職業訓練学校に拡大したいと述べた。

覚書には以下の学術連携についても記載されている。

・教職員の交流
・学生の交流
・論文やその他学術情報の共有
・共同研究、共同講義、シンポジウムおよび共同学術会議の開催
・教授法及び研究における教員の能力開発

Aganit副事務局長によると、高専はマレーシア、シンガポール、台湾の教育機関とも連携しており、今後は、高専がこれらの国と共同研修を行う際にタイの教員も参加できる。

(8月25日　Nation紙)

■大学卒業生と労働市場の需要のミスマッチ

タイ高等教育局（OHEC）は第4回学生教育会議を開催し大学卒業生と労働市場需要のミスマッチについて議論を行った。各参加者のコメントは以下のとおり。

タイ高等教育局 Piniti Ratanakul 副事務局長

2015年度のASEAN経済共同体発足により、今後タイ人学生は、多文化社会の中で働くことになり、ASEAN域内の6億人と労働市場で競うことになる。これに備え、大学は学生が国際社会の中で勝ち抜くためにリーダーシップ能力開発に力を入れるべきである。

DC Consultants and Marketing Communications Danai Chanchaochai CEO

タイの大学は労働市場の需要の50%以上の過剰な労働力を生み出している。今年は40万人以上の新卒者が就職できなかった。主な原因は、学生がタイ国内の労働需要を考慮せずに、人気に左右されて学部を選ぶためだ。また、大学を卒業しても学生は社会で求められるスキルを習得できていない。大学は、世界の変化に適応し、リーダーシップを持った人材を育成しなければならない。これは、必ずしも管理職につかねばならないということではなく、リーダーシップ能力を身に着けることが大切だということだ。社会に対する責任感を高めるために市民教育に力を入れるべきである。

シーナカリンウィロート大学
Chalermchai Boonyaleepun 学長

国の将来は国民の質にかかっており、大学は国民を啓蒙していく役割を担っている。質の高い国民とは、前向きな姿勢や高い教養とスキルを身につけている者である。大学は、暗記学習を減らし、ピア・ラーニングや地域に根差した学習テーマ、分野横断的な学習を促進し、学生を質の高い国民として育成するべきだ。

CP Retailink Thailand Co Ltd
Naris Thamkuekool 副社長

政治家は急速すぎる教育改革がネガティブな影響を及ぼすことを見落としてはならない。例えば、シンガポールや韓国は教育システムが優れているが、自殺率が高く過度なストレスが社会問題となっている。

（8月29日　Bangkok Post紙）

■社会のための科学研究

Yongyuth Yutthawong タイ副首相は軍事政権下において、「経済発展のため」ではなく「社会のため」の科学を目指すと述べ、以下の通り今後のタイの科学技術の在り方について述べた。

科学が経済発展のためではなく、社会のためを目指すのはこれが初めてだ。社会の発展は研究すべき最重要分野であり、科学技術は社会開発のために貢献しなければならない。例えば、中小企業支援などもその一つであり、中小企業の起業家が科学技術にアクセスしやすくなれば、ビジネス発展につながる。

Prayuth Chan-ochas タイ首相はまだ副首相の所掌業務を定めていないが、Yongyuth 副首相は教育、公衆衛生、科学、社会開発と人間の安全保障を担当することになると予想されている。Prayuth内閣は約一年間という暫定政権であり、この間に次期政権のための基礎を築くことを目指している。

Yongyuth 副首相は社会福祉の向上を最優先事項の一つと考えている。前Yinhluck政権の最低賃金300バーツ政策は良い方針だったが、最も重要なのは生計の立て方を教育することである。タイが中所得国から抜け出せるよう、今後は知識を貧困解決に役立て、国民のより良い生活に繋げたい。また、タイの国民が競争力をつけるために教育が重要な役割を果たすと考えている。

教育は一方的な知識の提供から学習者中心にシフトしているが、多くの教師がこれを理解していない。教師の役割は学生にアドバイスを行い課題解決のために導くことである。教員能力開発のために情報技術が役に立つと考えている。

（9月8日　Nation紙）

■第8回ASEAN教育担当大臣会議開催

2015年9月11日、ASEAN教育担当大臣会議（The 8th ASED）がベトナムで開催され、タイより Suthasri Wongsamarn 教育省事務次官を筆頭とし、ASEAN担当事務局長が参加した。

EUの支援のもと作成されたASEAN諸国の教育の現状についてまとめた報告書が提出された。報告書には、メンバー国がASEAN社会文化共同体計画（ASEAN Blueprint for Socio-Cultural Community）と教育に関するASEAN5か年計画（2011-2015）に基づき実施している取り組みの評価と教育マネジメントのデータが掲載されている。

また、ASEAN域内での教育の枠組形成と連携の進捗状況が参加国間で確認された。ASEAN域内での教育連携には、ASEAN Qualification Reference

Framework （ASEAN 域内の資格を比較できるようにする取り組み）、ASEAN 学生交流プログラム、ASEAN 大学ネットワーク憲章の検討等が挙げられた。

さらに ASEAN 経済共同体発足の 2015 年以降の教育連携の加速化も検討された。持続可能な開発に基づき、ASEAN 統合への認識を高め、全ての人に平等な教育の機会を提供し、生涯学習を開発するための取り組みを行うという人間中心の社会形成を ASEAN における教育連携の共通目標にすることが合意された。これらを踏まえ、ASEAN 域内の人々が急速に変化する国際社会に対応できるように、加盟国は人材開発に取り組まなければならない。

Suthasri 教育省事務次官は、タイは ASEAN Qualification Reference Framework を各教育段階の到達度を測る指針として用いるなど、ASEAN 域内の教育連携を支持してきたとアピールした。

また、2014 年 11 月にフィリピンで行われる ASEAN 域内での中等及び高等学校の学生交流プロジェクトの実施についても、タイは積極的に参加したいという意向を表明した。Suthasri 教育省事務次官は、2015 年以降の教育連携について以下の事項を提案した。

1. 就学前の子供たちが義務教育に備えることができるようにするための、幼児教育を支援。これは、「全ての人への教育」という目標とも一致している。
2. ASEAN 及び国際化社会に備えた教育を実施。
3. 教育カリキュラムの中に倫理や道徳を導入。

（9 月 12 日　タイ教育省）

■タイ教育改革へ向けたロードマップ

2014 年 8 月 14 日、Dr. Suthasri Wongsamarn タイ教育省事務次官及び教育大臣代理は国民の持続的な開発のための教育改革実行委員会の議論の結果を発表した。同委員会は、国民の持続的な開発のための教育改革ロードマップ(2015-2026 年)の作成、検討のために組織された。同ロードマップは委員会の作業チームにより起案された。

このロードマップは、2014 年 7 月に開かれた公開フォーラムや 8 月に行われた教員委員会、国家平和秩序評議会（NCPO）による教育改革方針に関する会議等、幅広い議論を集約して作成された。

ロードマップは、2015－2026 年までの実施期間を 1. 緊急対策期間（2015 年）、2. 中期計画期間（2016-2021 年）、3. 長期計画期間（2022-2026 年）の 3 段階に分けている。緊急対策期間（2015 年）には、以下 9 項目を実施する。

1. カリキュラム、学習方法、試験、評価システムの見直し、国の人材育成政策と連動した入学定員数、全ての世代の国民の教育

   不必要あるいは重複した学習科目をやめ、学習時間を削減し、子供たちが家族と過ごす時間を増やす。試験や評価のシステムがカリキュラムに準拠するようにし、学習指導は豊かな人間性の養成に焦点を当てる。

2. 職業学校の学生のイメージ向上にも取り組み、国公私立両方の教育機関で職業教育水準を高める。技術者の育成と地域発展のために職業学校における研究と開発を推進する。

3. 高等教育機関での研究開発を推進し、優秀な学生を輩出し、国の成長に必要な人材育成を行う。

4. 教育省の組織を再編し、権限を各地域の教育サービスを行う機関に委任し地域機関の教育への参画を促進する。教育省はこれらの機関の運営支援を行う。高等教育局と基礎教育局は、方針や政策が異なるため独立して運営されるべきだ。高等教育局は、基礎教育局と分離するための教育法改定案作成に取り組む。

5. 地方における全ての教育レベルでの優れた教員の採用。このため教員免許取得システムを改善する。

6. 国全体、各教育所管エリア、各教育機関レベルでの代表教員や教育専門家の任命。

7. 衛星を活用した遠隔教育の促進

8. 学生数に応じた助成金配分システムの見直し。金銭的な支援の必要性は学生によって異なるため、今後は、平等性、公平性、必要性に応じて配分を行う。障害を持つ学生、地方の学生、社会的に不利な立場にある学生に対してより多くの金銭的支援が必要である。

9. 情報技術を教育に導入する計画の見直し。

本ロードマップは関係省庁の合意を得た後に、最終的に新政権に提出される。

（9 月 14 日　タイ教育省）

■中所得国から抜け出すための科学技術

King Prajadhipok Institute により、2015 年ASEAN経済統合に向けたタイの科学技術に関するセミナーが開催され、Yongyuth Yuthavong 副首相、タイ科学技術開発庁（NSTDA）Thaweesak Koanantakool 理事長、タイ研究財団（TRF）Amaret Bhumiratana 理事が以下のとおり講演を行った。

Yongyuth タイ副首相

タイは科学技術イノベーションレベルを考慮すると、ASEAN のリーダー国となる潜在力を持っている。科学技術イノベーションは、タイが2030 年までに中所得国から抜け出すための鍵である。タイの科学技術イノベーションのレベルを向上させなければならず、そのためには教育が重要である。

今後 15 年間で中所得国から抜け出し先進国となるためには、息の長い努力が必要である。ASEAN経済統合によって政治、経済、社会文化の統合が進むが、これを受けて、科学技術も ASEAN 域内全体で統合されるだろう。

官民両方が参加し、科学技術分野での統合が進むことが ASEAN 諸国にとって望ましい ASEAN の科学技術における統合は隊にも大きな利益をもたらすだろう。

ASEAN 諸国は多様な文化を持っているが、貿易、産業、農業等の分野において共通する利益も多い。さらに、科学技術の発展とその応用による社会の発展という面においても共通の恩恵を受けることができるだろう。

NSTDA·Thaweesak Koanantakool 理事長

NSTDAは国の優先政策である中小企業支援を実施している。中小企業は、タイサイエンスパークの施設利用などのインフラ面での支援、技術トレーニング、セミナー、専門家データベースの利用などの人材面での支援、研究資金の提供や低金利での融資、共同投資や研究開発費にかかる税の 20 パーセント優遇などの資金面での支援を受けることができる。研究やテクニカル面では、受託研究や共同研究、試験分析サービス、産業化に関するコンサルタント、技術供与などを行っている。ビジネス面での支援も行っており、これには知的財産権に関するサービス、技術供与オフィス、ビジネスマッチング、ビザや就労許可取得の補助が含まれる。

テクノロジー事業の起業家から中小企業、さらに大企業まで、様々なビジネスステージに合わせて資金面、技術面、資源面での支援を提供している。タイサイエンスパークは、民間セクター、NSTDA と協力大学間での研究開発連携を促進している。

TRF·Amaret Bhumiratana Royal Golden Jubilee PhD プログラム担当理事

効果的な頭脳循環プログラムを推進し国際的な研究連携を進めることでタイの研究成果と影響力が国際的に高まるだろう。

このため、共同研究ネットワークと共同研究センターを設立しなければならない。共同研究プロジェクトは、タイの経済・社会問題の解決に資するものでなければならない。タイと外国の研究者は、研究資金を含めて、対等な立場で連携することが望ましい。分野横断的な研究者チームによる研究が成功することが実証されているが、研究ネットワークを効果的に活用すれば、様々な分野の研究者をプロジェクトに取り込むことができる。

（9 月 22 日　Nation 紙）

■マヒドン大学、ライフサイエンス医学部で QS 学部別ランキングアジアトップ 10 位

QS ランキングにおいてマヒドン大学は世界で 257 位、アジアで 49 位に位置づけられ、ライフサイエンス医学部は世界で 117 位と評価された（アジアでは 10 位）。マヒドン大学 Surakit Nathisuwan 副学長は、ランキングはマヒドン大学の質の高さ、特に長年強みとしてきたバイオロジーと医学分野の質の高さを反映していると同時に、タイの大学が世界で競っていけることを証明したと述べた。チュラロンコン大学は 243 位で、連続 8 年間タイの大学のトップとなっている。アジアではチュラロンコン大学は 45 位、チェンマイ大学 104 位、カセサート大学 135 位、タマサート大学 150 位だった。世界のトップ 5 大学は、1 位から順にマサチューセッツ工科大学、ケンブリッジ大学、インペリアルカレッジロンドン、ハーバード大学、オックスフォード大学である。QS ランキングは学術的な評価、卒業生の雇用者の評価、学生数に対する教員の割合、過去 5 年間の論文の被引用数、外国人教員の割合、留学生の割合の 6 つの項目で評価される。

（9 月 26 日　Nation 紙）

■**高等教育システムの改善**

2014 年 9 月 14 日、高等教育システムの改善について会議が行われ、Dr. Krissanapong Kirtikara 教育副大臣、Dr. Amornwich Nakornthap 教育大臣補佐官、M.D. Kamchorn Tatiyakawee 高等教育局事務局長、Assoc. Prof. Khunying Sumontha Phromboon 高等教育局長、Prof. Wichai Riwtrakul 高等教育副局長が参加した。各論点は以下のとおり。

1. 高等教育の役割の明確化
大学が各大学の理念に基づき、かつ国の需要に応える方向で大学の発展を行っていきたい。学生の教育に力を入れている大学は、国際的な水準に見合う優秀な人材を輩出しなければならない。研究に力を入れている大学は、国内の経済と経済分野の両方からの需要に応えなければならない。また、世界で競えるレベルの研究開発を行わなければならない。

   高等教育局は大学側と話し合い、高等教育の役割を明確化するために政府からどのような分野での支援が必要であるかを特定する必要がある。教員の資質開発のためのガイドラインの策定、奨学金、開発のための資金、予算配分システム、内部及び外部監査などがこれには含まれる。

2. 各大学の理念と国の要望に沿った大学改革
高等教育局は、大学のカリキュラムを管理し、大学の理念と国の要望に沿った教育を学生に対して行っているかどうか監督しなければならない。以下 2 つの面での監督が必要である。

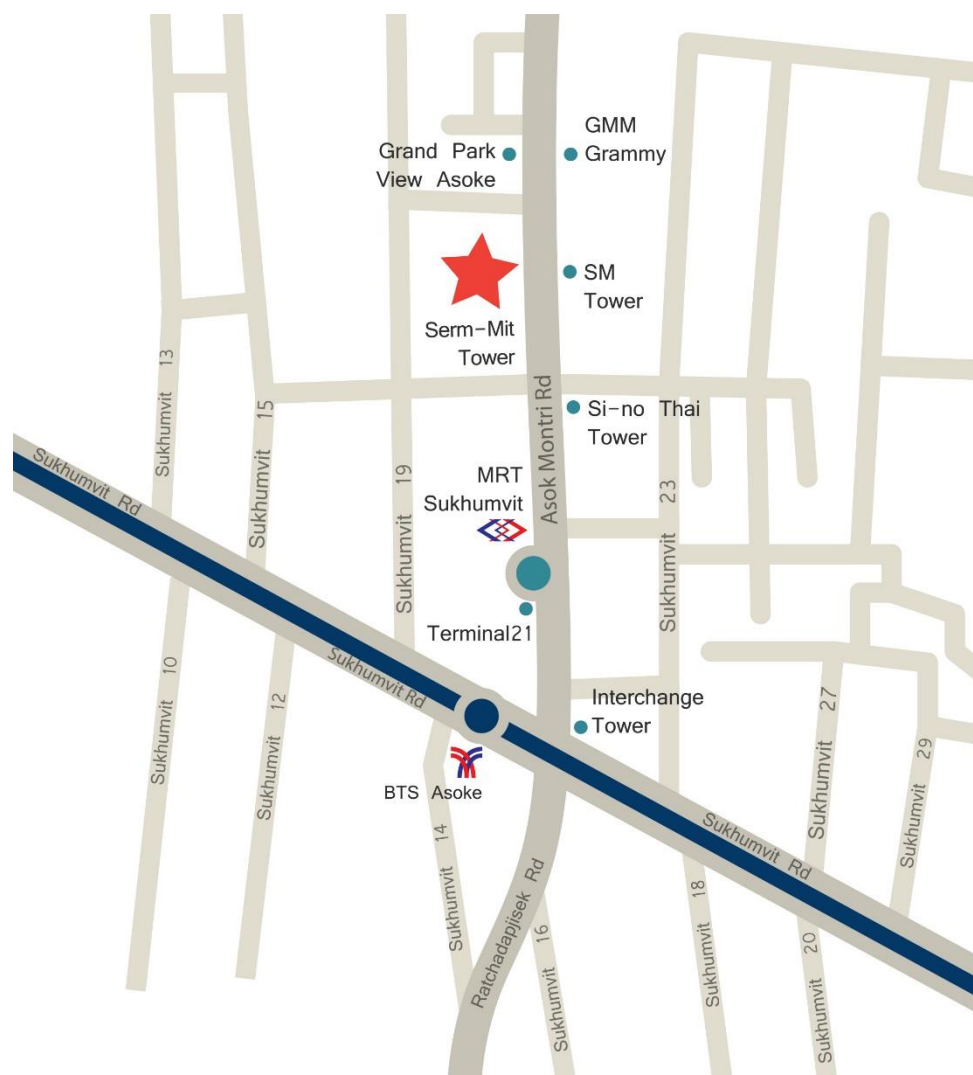
   1）カリキュラム
   高等教育局には、大学の数やそのカリキュラム、学生数を管理する権限がない。過去 10 年間、卒業後すぐに就職できるのは、大卒者 3 人に対して 1 人だった。このため、毎年、15 万人の大卒者が就職先を見つけることができていない。この人数は今後も増える見通しで、これは、教育レベルや学習分野が労働市場の需要と合っていないためである。例えば、大卒者が増加する一方で、就職先の募集があるのは職業学校や高等職業学校の卒業者である。十分な学業を身につけないまま卒業する者もいる。彼らが就職先を見つけることができなければ、学生ローンの返還も滞ることが懸念される。

   2）大学データ
   大学は、各コースにおける収益と卒業生の雇用先と収入データを開示することが求められる。現在、高校生とその親は、大学卒業後の各コースにおける就職に関する情報がほとんどない。さらに、予算を配分する政府も大学の各コースの収益を確認できていない。

   今後、高等教育局の大学のカリキュラムの監督と卒業生の質と量の管理を行う役割について議論が必要である。さらに、大学のデータ開示を進めることで、大学は、国や地域の需要に応えたカリキュラム設計を行い、社会の発展につなげることができるだろう。

3. 教員養成と開発のための教育学部の役割
高等教育局はすでに教員養成と開発のシステムを監督しているが、教員開発に取り組んでいる機関がほかにもあり、教員養成システム構築のために様々な機関を巻き込んだ話し合いが将来的に必要である。

（9 月 26 日　タイ教育省）

日本学術振興会バンコク研究連絡センターの所在地

日本学術振興会バンコク研究連絡センター/JSPS Bangkok Office

1016/1, 10th floor, Serm-mit Tower, 159 Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110, Thailand

tel +66-2-661-6533 fax +66-2-661-6535

Website: http://jsps-th.org

Email: jspsbkk@jsps-th.org

編集後記

7月にフィリピンでJSPSガイダンスセミナーを行い、JSPS同窓会理事に日本での研究経験を話していただきました。その中で、生活で困ったときに、知り合いの先生が親身になって助けてくださったエピソードを披露していただきました。9月にバングラデシュでセミナーを行った際には、宮崎大学で研究された先生が宮崎を第2のふるさとだとおっしゃっていました。外国人研究者や学生を温かく受け入れていただいた大学や研究室、また地元の方々のおかげで、母国に帰国後も日本との関係を大切にしている研究者がたくさんいるのだと感じました。

（バンコクセンター国際協力員　轟　裕美）